日本書道史

第12講「幕末の三筆と六朝書道」

住川 英明（岐阜女子大学）

第12講「幕末の三筆と六朝書道」

【学習到達目標】

- 「幕末の三筆」の書作品について，実証主義の展開の観点から，具体的な作品例にもとづいて説明することができる.
- 「明治の三大家」の書作品について，清朝からの新資料の流入等を踏まえて説明することができる.

第12講「幕末の三筆と六朝書道」

1．書家としての巻菱湖と市河米庵

- 「書家」という職業は，すでに江戸時代の『武江年表』などに見えており，当時は様々な流儀書道の教授を業とする者であったらしい．ただ，学者や画家でありながら書を能くする場合も，書家と呼ばれていた．
- 江戸時代後期，後に幕末といわれる時代に，能書で知られた書家は多いが，なかでも巻菱湖・市河米庵・貫名菘翁が「幕末の三筆」と呼ばれ，尊重されている．

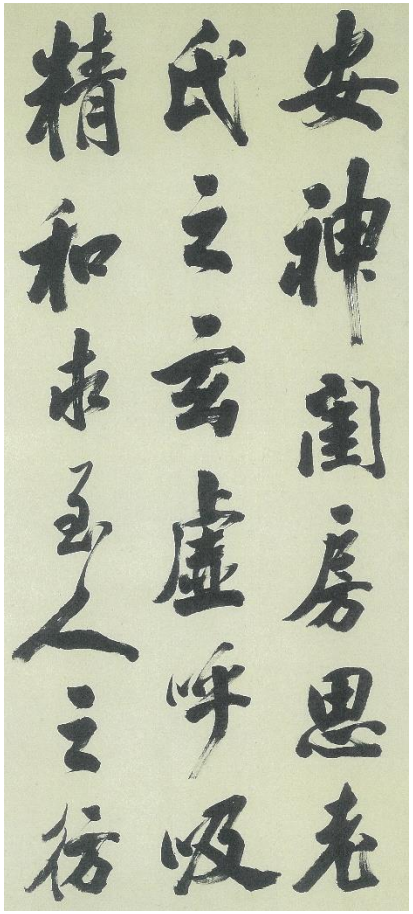
第12講「幕末の三筆と六朝書道」

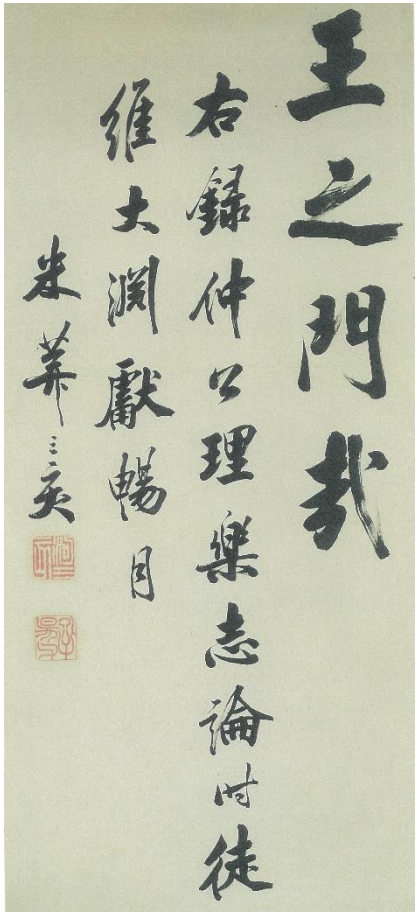
1．書家としての巻菱湖と市河米庵

- 菱湖は，趙孟頫の書を見るような，整斉平明で嫌味のない書を遺しており，その人柄の韜晦さや放逸さとともに，様々なエピソードをもって伝えられる．
- 米庵は，加賀前田侯に仕えた学者であり，屋敷の前には入門を請う者が引きもきらなかったといわれる．米芾の書を好み，文房四宝などの収集は豊かなものであった．中国の書論を抄録・解説した多くの啓蒙書を発刊して，書道文化の拡大に大きな貢献を果たした．

第12講「幕末の三筆と六朝書道」

巻菱湖《一行書》





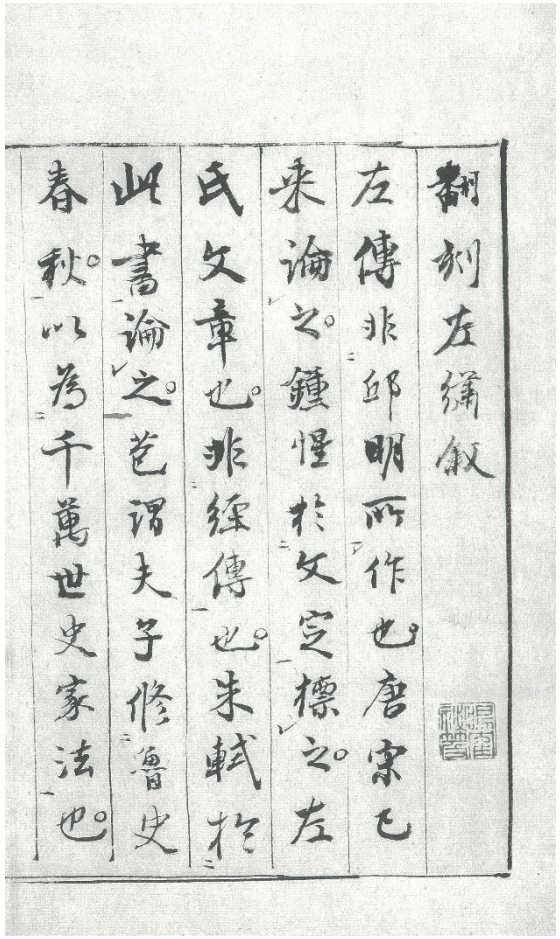
市河米庵《楽志論屏風》（部分）

第12講「幕末の三筆と六朝書道」

2．貫名菘翁における実証主義の展開とその評価

- 京都の儒学者であった貫名菘翁は，日中の名跡を広く鑑賞して臨書に努め，自己の知見を高めたことが知られている.
- 菘翁の書は，京都の風土をよく反映した温雅で精緻なものであったため，人々に広く受け入れられたが，明治時代の書家や知識人によって強く称揚されるに及んで，さらにその書名は高まった.
- 前代から形成されてきた実証主義的な学書の方法は，菘翁に至って1つの頂点を成した.

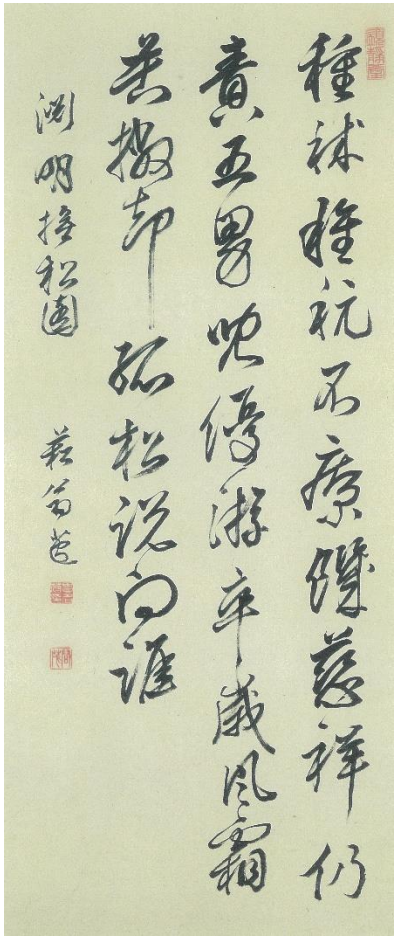
第12講「幕末の三筆と六朝書道」



翻刻左繡叙

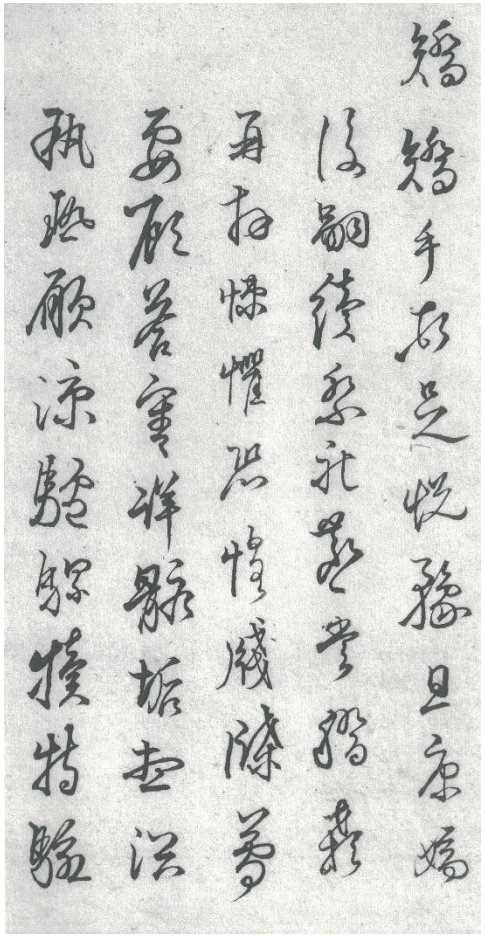
左傳非邱明所作也唐宋已來論之鍾惺於文定標之左氏文章也非經傳也朱軾於此書論之芒謂夫子修魯史春秋以為千萬世史家法也

貫名菘翁《左繡叙稿》（部分）

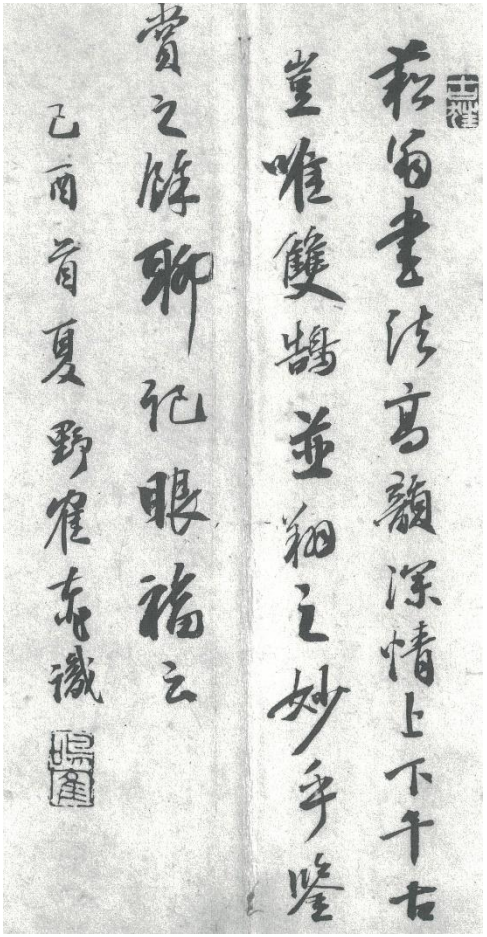


貫名菘翁《七言絶句》

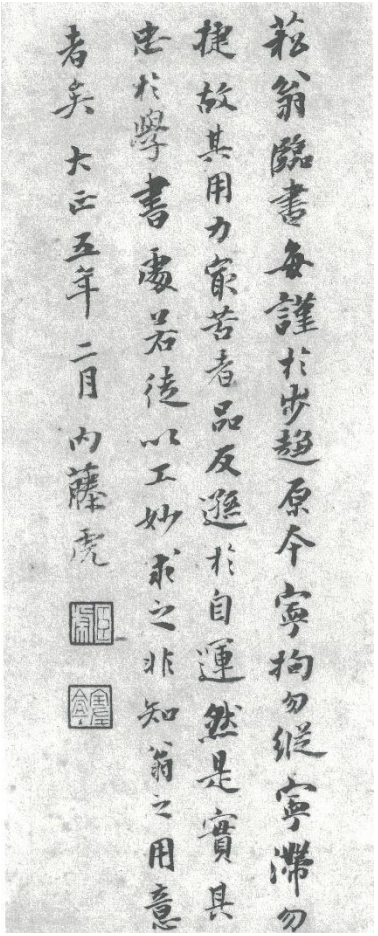
第12講「幕末の三筆と六朝書道」



貫名菘翁《臨邢子愿草書千字文》（部分）



日下部鳴鶴《菘翁臨邢子愿草書千字文跋》



内藤湖南《菘翁臨子邢愿草書千字文跋》

第12講「幕末の三筆と六朝書道」

2．貫名菘翁における実証主義の展開とその評価

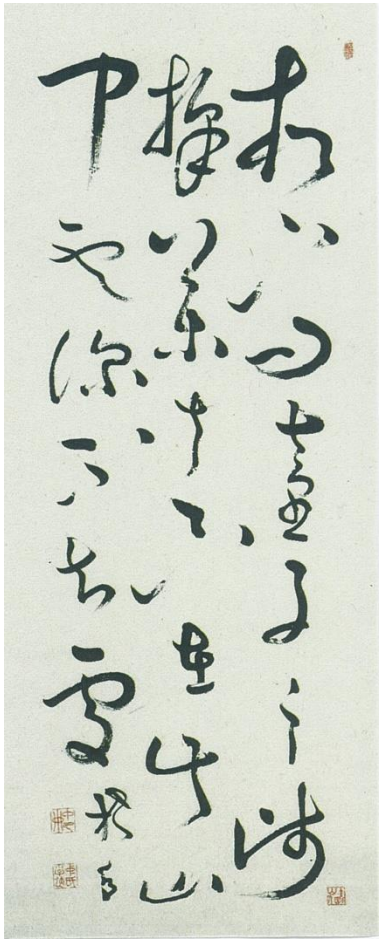
- 菘翁書法，高韻深情上下千古。豈唯双鵠並翔之妙乎。鑑賞之余，聊記眼福云。己酉首夏，野鶴東作識。（日下部鳴鶴：1838－1922）
- 菘翁臨書，毎謹於歩趨原本。寧拘勿縦，寧滞勿捷。故其用力最苦者，品反遜於自運。然是実其忠於学書処，若徒以工妙求之，非知翁之用意者矣。大正五年二月，内藤虎。（内藤湖南：1866－1934）

第12講「幕末の三筆と六朝書道」

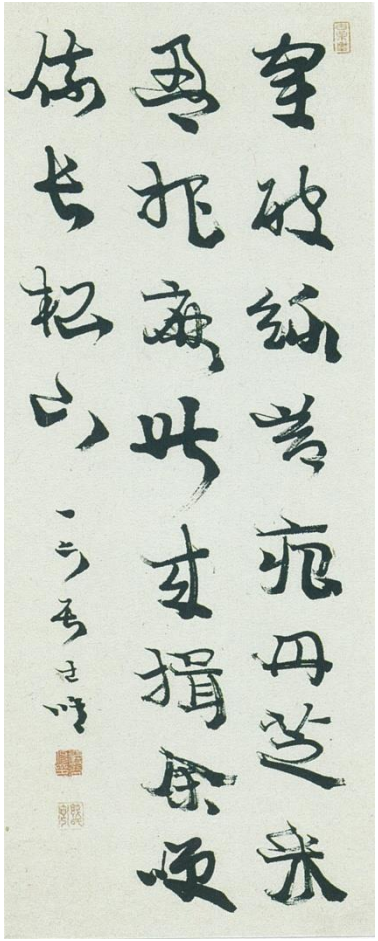
3. 明治の書家と「六朝書道」

- 清国に渡って書を学んだ人々は，中国で流行していた魏晋南北朝時代の書風，特に北朝の書風や漢時代以前の篆・隷書体の書風を習得して，数多くの文物を持ち帰った.
- 1880年（明治13年）に清国の地理学者である楊守敬が来日すると，日下部鳴鶴・巌谷一六らの書家たちは，勇んで彼のもとを訪れ，数多くの碑法帖類を鑑賞しながら，筆談を通じて書に関する様々な新知識を修得した.
- 「六朝書」という言葉は，本来は魏晋南北朝時代の書のことを指すが，この時期には北朝の石刻書風を指して六朝書といい，学書の方法も含めて「六朝書道」と呼ぶようになった.

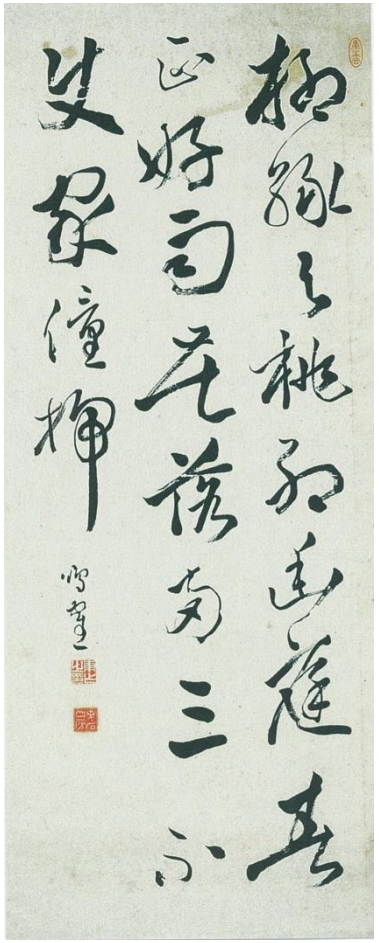
第12講「幕末の三筆と六朝書道」



中林梧竹《賈島詩》



巌谷一六《自作詩》



日下部鳴鶴《五言絶句》

第12講「幕末の三筆と六朝書道」

3．明治の書家と「六朝書道」

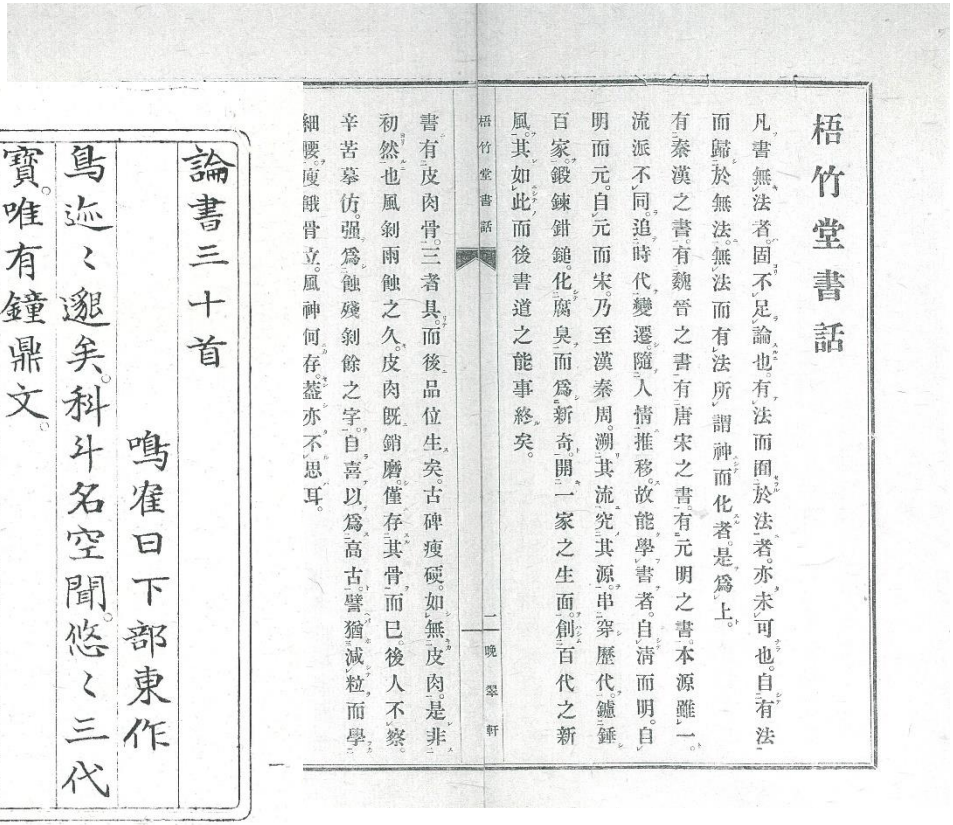
- 中林梧竹の書は，羊毛筆によるのびやかな線と金石書に親しむなかで得られた自在な文字造形・全体構成が特徴的である.
- 巌谷一六の書には，金石書風に影響されたらしい独自の切れ味があり，文人らしい風趣が漂っている.
- 日下部鳴鶴は，唐様書で学んだ巧みさの上に，碑法帖で学んだ解釈や知見を援用し，力強くしかもよく整った書風を作り上げた.

3．明治の書家と「六朝書道」

- この時代においては，梧竹の『梧竹堂書話』，鳴鶴の『論書三十首』やその談話をまとめた『書訣』，没後に門人によって編まれた『鳴鶴先生叢話』など，数多くの書論・書話の類が発刊された．
- 書論・書話は，書家の主義・主張をより明確なかたちで流通させることにつながり，このような媒体による言説の普及とそれによる思潮の形成は，後の時代に大きな影響を与えることになった．

第12講「幕末の三筆と六朝書道」

中林梧竹『梧竹堂書話』



梧竹堂書話

凡書無法者固不足論也有法而囿於法者亦未可也自有法而歸於無法無法而有法所謂神而化者是爲上

有秦漢之書有魏晉之書有唐宋之書有元明之書本源雖一流派不同追時代變遷隨人情推移故能學書者自清而明自明而元自元而宋乃至漢秦周溯其流究其源串穿歷代鑪錘百家鍛鍊鉗鎚化腐臭而爲新奇開一家之生面創百代之新風其如此而後書道之能事終矣

書有皮肉骨三者具而後品位生矣古碑瘦硬如無皮肉是非初然也風剝雨蝕之久皮肉既銷磨僅存其骨而已後人不察辛苦摹仿强爲蝕殘剝餘之字自喜以爲高古譬猶減粒而學細腰度餓骨立風神何存蓋亦不思耳

日下部鳴鶴『論書三十首』

論書三十首

鳴雁日下部東作

鳥迹〻邈矣科斗名空聞悠〻三代寶唯有鐘鼎文

鳥迹科斗其文不傳今世所存之文字唯以鐘鼎彝器銘爲家古余嘗在清國觀吳清卿大澂所藏三代彝器數十百種其款識皆作古籀文純古尓雅洵爲人間文字之祖

彰〻周客文的知微子鼎鴻寶少等倫湯盤美堪並

課　題

１．貫名菘翁の書と学書の方法は，なぜ明治の識者から高く評価されたのか，考察しなさい.

第12講「幕末の三筆と六朝書道」

【学習到達目標】

- 「幕末の三筆」の書作品について，実証主義の展開の観点から，具体的な作品例にもとづいて説明することができる.
- 「明治の三大家」の書作品について，清朝からの新資料の流入等を踏まえて説明することができる.

日本書道史

第12講「幕末の三筆と六朝書道」

住川 英明（岐阜女子大学）